
面倒な主従

サキスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

面倒な主従

【Nコード】

N4469P

【作者名】

サキスケ

【あらすじ】

さくらいくみこ
櫻井久美子、二十五歳、O型。

小学生の頃からミスターチルドレンが好き。ここ最近お気に入り作家は新井素子。学生時代は江古田に住んでいたこともあり、『臨死！！ 江古田ちゃん』という漫画に異常なシンパシーを感じている。ちなみにまだ読んでいない。が、内容を聞いたところきつと気に入るだろうと思っている。が、一番好きな漫画家は岡崎京子。

『ヘルタースケルター』はもう何度読んだかわからない。

と、ポチの話。

いち

「ただいまーっと」

壁を伝う振動が部屋を揺らすと同時に入り口の重いドアが開かれ、部屋の主の帰宅を告げる声が廊下に響いた。その音を合図として、彼は定位置に座り直す。それに続いて部屋と廊下を繋ぐドアがかちやりと軽い音を立てた。

「今日も疲れたよー」

部屋に入ってきた女性は、部屋の中央にどっかりと置かれている、膝くらいまでの高さで長方形をした黒く塗られているテーブルにビール袋を置いた。袋の中には駅前のスーパーで買った、定価から半額が引かれた期限ギリギリの惣菜やカップラーメン、紙パックの烏龍茶、お得用サイズのアイスクリームが入っている。

「おーもかったーよー」

彼女は誰にともなく緩い旋律のオリジナル曲を歌い、アイスクリームだけは廊下のキッチンのコンロ下にある、備え付け単身者サイズの冷蔵庫に放り込んだ。そして彼女はそのまま洗面所に入った。ちろちろと水の流れる音が聞こえてくる。彼女はいつも家にたどり着くと真っ先に顔を洗い化粧を落とす。すっぴんでいる時間が長ければ長いほど幸せだ、といつか彼女は言っていた。

少しして部屋に戻ってきた彼女は既に着替えていた。白地に大きな母がプリントされた、さらさらとした手触りの素材を使ったパジャマ。

彼女はテーブルの上に無造作に置かれていた眼鏡を手に取り、自然と目の前に垂れた前髪を左右にかき分た。そして眼鏡をかけるときに「スチャ」と言い、ニヤリと彼を横目で見た。彼としてはいままさら特にコメントはしない。ただ、表情には出さないが内心で愉快的な奴だとは思っていた。

彼女はベッドを後ろにしてテーブルの前に置かれた座椅子に座り、

ビニール袋を無造作にテーブルの端へどけてテーブル中央に置かれたノートパソコンの電源をいれた。モニタに明かりが点き、ディスプレイがゴリゴリと駆動音を立て始める。背中を丸めて画面を見ていた女性だったが、パソコンの起動にはまだ少し時間がかかりそうだった。彼女はベッドに座っている彼にゆっくりと向き直り、安心してにつこりとした微笑みを見せ改めて挨拶をした。

「ただいま、ポチ」

ポチは残念ながらおかえり、という挨拶を口に出して返すことはできない。その代わりに、心の中でおかえりと優しく挨拶を返したように、ほんの少しだけ頷いたようだった。

櫻井久美子（さくらいくみこ）、二十七歳、O型。

小学生の頃からミスターチルドレンが好き。ここ最近お気に入り作家は新井素子。学生時代は江古田に住んでいたこともあり、『臨死！ 江古田ちゃん』という漫画に異常なシンパシーを感じている。ちなみにまだ読んでいない。が、内容を聞いたところきつと気に入るだろうと思っている。が、一番好きな漫画家は岡崎京子。『ヘルタースケルター』はもう何度読んだかわからない。

ちなみに一人っ子。

新宿にあるファッションビルの一画、様々な雑貨を扱うショップ内で主に食器を担当している。

身長は159センチ、体重は秘密。顔は卵形。多くの女性からかわいいと言われ、少なくとも数の男性から好意を持たれた。しかし小学生の頃にクラスメイトの田中くんから言われた「ブス」という言葉をいまだに耳の中に響かせている。

肌が綺麗だと人から褒められるとしばらくの間は菩薩のような心持ちで過ごし、朝の通勤ラッシュでアラフォーと思われるスーツ姿の男性と肩をぶつけ、キツと睨まれるともうその日は家に帰るまで立ち直れずに沈んでいる。

そんな彼女はスーパーで購入したカロリーを摂取し終わると、

プラスチックのケースをビニール袋に戻し、ごみ箱に放り込んだ。
パソコンのスピーカーから、保存されている楽曲がシャッフル再生
によってランダムに再生されている。お気に入りの曲がかかると、
歌詞を覚えているフレーズを口ずさみ、あまり好きではない曲だと
マウスをカチツとクリックしてとばしてしまう。

次々と閲覧先を変えてはパソコンのモニターを熱心に見つめている
背中、ポチはその曲線を好ましいものだと思うようになっていた。
体操座りに近い姿勢でネットサーフィンを続ける彼女は特にその視
線を気にしていなかった。

素足の指先。たまに右足の親指と人差し指をはじくように動かす。
特に意識せずにされているだろうその動きを見るのも、ポチは好
きだと思った。

「ふう」

小さく息を吐き出した彼女は、パソコンの脇に置かれている手の
平ほどの大きさのプラスチックでできた時計を見た。いつから使用
しているものなのか、もう彼女にもわからなかったが、壊れるまで
は使おうとなんとなく思っていた。時刻は十一時を示している。

「お風呂入ってくる」

僅かに首を右後ろにやり、ポチに視線を合わせることなく次の行
動を告げると、部屋の隅にあるクローゼットを開けた。ローラーが
ごろごろと音をたて、木の扉が横へスライドする。

「ねえ、ポチ」

入浴を終えた彼女は髪にドライヤーの温風を当てている。肩甲骨
の下辺りまで伸ばされた栗色の髪の毛は、なかなか乾かない。温風
を当てる位置はあまり変えず、左手で髪を上下に散らしている。

応える声はなかったが、鏡ごしに視線は交わっていた。そのまま
会話がされることはなく、たっぷり五秒ほど無言で見つめ合った後、
彼女から視線を外した。

「うつん、何でもない」

こういうことは、よくあることだ。彼女が何を言おうとしたのか、当然ながらポチが追求することはない。なぜなら、彼はポチだから。今の呼びかけはなんだったんだろうと、しばらく視線を彼女の背中に固定するだけ。

「今夜はもう寝る」

少しすねたような、そんな声だった。

彼女は髪を乾かし終え、キッチンへ歩いていった。冷蔵庫を開け、中に入っていたペットボトルのスポーツドリンクを取り出し、直に口をつけて飲む。ごくごくぐりと、液体が喉を下るときに動く彼女の喉元も、ポチは好きだと思っていた。

「電気消しまつす」

声に少し遅れて電灯が消され、部屋はカーテンの隙間から入る明かりだけになった。

「もう、邪魔だよ」

彼女はそう言ってポチを壁側に押しやった。壁に向いたまま身動きのないポチの背中に、彼女の手の平が触れた。その感触は何度か背中を上下し、やがて肩に触れ、後頭部に触れ、腰に触れた。ポチは何も反応らしい反応を見せず、ただただ壁を見つめていた。彼はよくしつけられていた。少しすると、手は腰を離れ、ポチの右手を軽く握った。

「おやすみなさい」

もちろんその声に答えはなかったが、彼女は手を握り返されたような感触を得た。

に

「今夜は帰らないからよろしく」

家を出ていく彼女の顔はなんだか嬉しそうであり、恥ずかしそうでもあり、でも同時に後ろめたいような、そんな感じだった。その宣言通り、彼女はその夜帰って来なかった。

翌晩、帰ってきた彼女は留守番ありがととまずポチに礼を言った。彼女は底抜けに上機嫌で、頭のネジが緩んだようだった。ふとした瞬間に「ふふふ」と小さく笑う彼女は喜びの絶頂にいるように見えたが、どうも一種の暗さのようなものがその両肩あたりにどんよりと膜を張っているようにも感じられた。

けれどもそう感じていたのはどうやらポチだけであり、その本質はどうあれ幸せを感じてやや不気味に微笑む彼女の気分に水をさすこともないかと思って眺めていた。しかしやはりと言うべきか、残念ながらポチが感じていたスッキリしない感じは、悪い現実を示すものらしかった。

二日後、日付が変わるくらいに帰ってきた彼女はぼろぼろだった。流れる涙でメイクははがれ、黒い筋が頬についていた。彼は主人の悲しい帰還に対して何をするでもなく、定位置に座っていた。

「笑いなさいよ」

主人は低い声を発した。対して彼は笑うでも悲しむでもなく、当然哀れむでもなく、いつもと同じように彼女を見つめていた。

「すましてんじゃねえよ」

テーブルの上にあったテレビのリモコンが投げ付けられ、彼は思わず顔を庇った。右手に鈍い痛みが走るが、彼は痛がるそぶりを見せなかった。弾かれたリモコンは回転しながら勢いよく飛び、上手い具合にごみ箱に突き刺さった。

「なに見てんのよ。そんな馬鹿にした目で見ないでよ。どうせ馬鹿な女だって思ってるんでしょう。ふざけるんじゃないわよ。情けで

置いてあげてるのにいつちよまえの顔して何様のつもりよ。見るんじゃないわよ」

怒りのままにぶつけられた言葉にも、やはり彼は何も返さなかった。ただ、彼女を見ていない方がいいと思ったのか身体をベッドに横たえ、壁を向いて目を閉じた。それで終わりだった。

彼女の激昂も一旦区切りをつけたようだった。鞆を床に置いた音が聞こえ、その後は乱暴に冷蔵庫を開け閉めする音が続いた。乱暴さの中に寂しさがはつきりと感じられる、誰かにしがみつきたいような気持ちを発散させる音だった。

その音が止んで少しすると、ユニットバスからシャワーの音が聞こえてきた。ちよつと休むといいよ、ポチはそんな気持ちで水の流れる音を聞いていた。

ポチはしばしまどろみ、ふと目を開けた時には頭を撫でる気配があった。彼女は頭を撫でるのが好きだ。ポチも頭を撫でられるのは好きだったので、そのままにしておいた。

「起きてるでしょう」

彼女の声は申し訳なさそうで、恥ずかしがっているようだった。きつとシャワーを浴びながらたっぷり泣いたんだろうとポチは思った。ゆっくり身体の向きを変え、彼女の顔をみる。彼女は撫でるのを止め、手をポチの傍らに落とした。

「ごめんなさい」

視線を手元に落として彼女は言った。ポチには、その仕種は演技ではないように見えた。彼女の肩が、小刻みに震えていた。

「ごめんなさい」

言葉を返さないポチに、彼女はもう一度詫びた。ポチが許しを与えるまで、何度でもいつまでも謝っていそうだった。だからポチはよく自分がされているのと同じように、手を彼女の頭に軽く乗せた。彼女の髪はボリウム感があり、指通りが良かった。ポチは言葉が話せない。だって、ポチだから。

首に回された感触に、不快は感じなかった。耳をくすぐる吐息は

むしろ心地よく、ぴったりとくっつけられた身体は温かった。首を這う舌のざらついた感触がくすぐったかった。ポチはちょうどバンザイをしたように両手を上にあげ、抱き着かれるままになっていた。

一通りの愛撫を終え、彼女はポチの首筋から顔を上げた。その目は潤み、跳ね上がった鼓動に伴い、息遣いもポチの耳には一回毎にかなりの圧力をもって響いていた。彼女は目を閉じた。

それでおしまいだった。

「こういうことはしない約束だった」

ポチは彼女の体重をやんわりと押しのけ、部屋の隅にかけられていたコートを羽織った。

それ以上何も言わず部屋を出ていった。ポチはポチであることを止め、拒絶の言葉だけを残して出ていった。

一人取り残された彼女は、しばらくシーツを握って震えていた。やがて枕元にあつた置き時計を乱暴にカーペットに投げ付けると、布団に顔を押し付け、誰にも聞こえないようにして泣いた。

さん

特にどこに行こうというわけでもなかった。ただ、あれだけ一人のところに行ったのは久しぶりだったような気がする。それはきつと、彼女の側にいることが彼にとってここちよい時間だったからだろう。彼女にとっての彼がどうだったかは、わからない。

ただ、悲しみの勢いで触れられて喜ぶような程度ではつまらない、と思うくらいには彼女のことを考えていた。ポチはいつの間にか、けっこうな感情移入をしてしまった自分に少し呆れて溜め息をついた。それはやや珍しいことではあり、もったいないことをしたという気もないではなかった。

そうこうするうちに、彼はいつの間にか彼女と出会った場所にたどり着いていた。なんのことはない、駅前の地図盤がある小さなスペースだった。改札の明かりは既に落とされ、改札を抜けた先はもう真っ暗になっている。

人の気配がないわけではない。周囲にはチェーン店の居酒屋が朝方まで営業しているし、すぐ隣にあるコンビニの明かりはついていいる。さらに言えば、そこには二人の青年が雑誌を読んでいるのが見える。

けれども、その中に一人ぼつんと立っていたポチは言いよつのない寂しさを感じていた。それはきつと、珍しく二週間に近付いた滞在期間に原因があるのかもしれない。時間が長くなれば長くなるほど、自然と人の情は移る。情をなくすような心情に陥るほど世を憐んでいたわけではなかった。

なんだか疲労感がとても強かった。特に体調が悪いわけではなかったはずだが、気分はすこぶる悪かった。

「どこかに帰らないとな」

無意識にぼつり呟く言葉に、都合のいい反応を求めている。

まだ手持ちの金はある。ただ、できれば一カ所にもう少し長く留

まっていた気がしていた。そこで真っ先に思い返されるのは、たった今捨ててきた飼い主の優しい感触。ポチが彼女に親しみを持ったのは、彼女が本当に寂しさの中にいて、同時に優しい人だと思ったからだ。

今まで彼をポチとして扱った中に口くいな飼い主はいなかった。もちろん、ポチもサービスとしてやっていたことに過ぎず、その点に文句があるわけはなかった。むしろ、大した労働があるわけでもなく、滞在期間のわりに日給換算をすれば大金を稼ぐこともできていたのだから、文句はなかった。道具扱い、ペット扱いに文句はないただ、身体はその対象にない。身体を売ることをサービスにしようとは考えていなかった。

「あーあ」

溜め息は電灯の明かりに照らされた地面に吸い込まれていくようだった。ポチは肩を落とし、側にあつた車止めに体重をかけてしばらく黙っていた。

意味もなくぼんやりと地面を見つめるポチの視界に、見慣れたミユールが目に入った。

「帰って、きてよ」

顔を上げると、目をはらした飼い主が目の前に立っていた。まさか彼女が追いかけてくるとは想像していなかった彼はどうしたものかとしばし悩み、「ワン」と一声鳴いた。ビキビキという音が聞こえてきそうな様子でこめかみを痙攣させたかつての飼い主に、彼の表情もひきつった。

「せめてポチって呼ばれてるときにいいなよ」

「はい」

しゅんとうなだれて見せるのは、少しでも軽い空気になりたいから彼女に対してあまり深刻さをもつて相対したくなかったから。その希望は理解してもらえずにどうも白けた感じになってしまっていた。が、彼の方から一言告げないと話が先に進まないようだった。

「一度出てきた飼い主のところにはもう行かないようにしてる」

再び視線を地に落とし黙り込む彼の頭に、無言でぽんと手が置かれた。

二人は言葉を交わすことなくしばらくそのままの姿勢で固まっていた。吐き出す息は白く、指先もつま先もすっかり冷たくなってしまっていた。彼女は何も言わないままに彼の頭を撫で、彼は撫でられるままにその感触に身を委ねていた。

「じゃあ、今度はあなたが私を買ってよ」

「なんでそういう話になるのかわからない」

「だって、そうでもしなきゃあなた私と一緒にいてくれないでしょ」
「そんなめちゃくちゃない分に従う道理はなかった。なかったが、彼には魅力的な提案のように思えていた。」

「買われたあんたは、どうするんだ」

「何でもいい。ただあなたと一緒にいたいだけ」

「俺と一緒にいたいんじゃないかって、誰かと一緒にいたいだけなんじゃないのか。一人でいるのが寂しいだけだろう。懲りずに男に弄ばれて、好きなようにされて、空しいだけだろう。それを何かで埋めたいだけだろう」

「……それが悪い？」

「別に、よくある話だと思う」

そう、よくある話だった。ただ、そうなるまでの時間が長かっただけだ。今までと違うのはその一点だけで、その一点が意外に大きく響いていた。

「よくある話だと、つまらない？」

「結果は同じでも、過程は面白かったよ」

「じゃあ、どうするの？」

「条件は？」

それくらい聞いてもいいはずだった。それだけでは、聞くだけでは何もならない。しかし、それを聞くということが既に結末を示しているということを、彼は知っていただろうか。

「一週間で五万円」

「金を返せつてこと？」

彼女が提示した金額は、彼が彼女に要求した金額と同じだった。ただ、彼女は二週間目に突入していたので、既に彼に十万渡していた。

「そういうわけじゃない。それに私は、あなたが私を求めてくれるなら、応えるつもり」

「なんでそういうことになるかな。そんなことをして何になる。今の寂しさは埋まるかもしれないけど、それが良いことだとは思えない」

「あなたは、はいかいいえで返事さえしてくればいいの」

まだ金はあった。買えるか買えないかであれば、買うことはできる。問題は、今まで彼は買われる側であり続けてきたという来歴。自分が誰かを買うということ想像してこなかったことだ。自分が他人に向けて提供するサービスの、受け手に回るというシチュエーションは考えたことがなかった。ここにあるのは倫理感などでは当然なかった。

今のところ、彼が彼女に対してより興味を持ち始めていることは確かだった。いまさら一週間一緒にいたところで、その相手に対して好意を持つことはないはずだ。

「わかった」

さらに言えば、興味を持つこともあまりなかった。

「本当に？」

「ただし条件がある。その一週間を過ごすのはあなたの家だ」

それが一緒に過ごしたいと思うなんて、本当に珍しいことだった。

「いいよ」

「もう一つ、あなたは今までと同じようにしていればいい」

「なんで？」

「今更立場を大きく変えられても面倒だから」

だからこのとき、冷静を装いながらも、何を言ってるのかいまいち頭を働かせていない彼だった。あまり頭の良くないことを言っ

いるという自覚だけは十分にあったが。

「いいよ」

頷く彼女は少し可笑しそうな顔をしてやっと微笑んだ。もちろん、なぜ彼女が微笑んだのかを彼は理解していなかった。

「なんだよ」

「ううん。でもさ……やっぱなんでもない」

「なんだよ、気になるだろ」

「うん。買ってって頼んで、あなたは買ってくれる。でも私には今までと同じようにしてろって。それってなんだか、あなたが私を養ってくれるみたいにも聞こえるね」

「そんなことはない」

彼はそれだけ口にして歩き出した。彼が足を向けたのは先ほど出てきた彼女の家がある方向で、なぜか少し早足のようでもあった。

「なに、急に」

大股でスタスタと進んでいく彼に遅れないようにと彼女も慌てて歩きだす。二人ともお互いの表情は見えないままに、穏やかな笑みを浮かべていた。

「そんなに早く歩かないだよ」

後ろから腕に抱き着いた彼女の勢いに少しよろけた彼だったが、特に文句を述べるでもなく、手をコートのポケットに突っ込んで歩く。

一週間という期間が彼ら二人にとっては特別で、約束した期間があるからこそ二人はお互いをじっと見ていられるのかもしれないが、恋人とは呼べない二人が恋人になるのは次の一週間か、それとも一週間を待たずに気まぐれだったという結論が出るのか、それはまだわからない。

ただ、飼われるのに慣れたポチは、一人でいることが怖くなっているのかもしれないと、体重を預けてくる女性をぎゅっと抱きしめながら思った。

さん（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4469p/>

面倒な主従

2010年12月12日20時40分発行